

ヒメボクトウの被害と防除対策

◎ヒメボクトウの被害



リンゴ



ニホンナシ

2011/08/23

◎防除対策



ボクトウコン- Hの設置



フェニックスフロアブルの散布

13/07/10



バイオセーフの樹幹注入

発生状況

福島県では2009年に福島市のリンゴといわき市のニホンナシでヒメボクトウによる被害が初めて確認されました。その後、リンゴでは県中、県南、会津地方で被害が確認され、ニホンナシでは県北、県中地方で被害が確認されています。また、阿武隈高地で栽培されているイチヨウでも被害が確認されています。

被害の特徴

ヒメボクトウの幼虫は集団で枝幹内部を食害するため、被害を受けた樹は寄生部位にあいた多数の被害孔からフラス（虫糞と木屑が混じったもの）が排出されます。被害を受けた樹は被害部位から先が衰弱し、被害が進むと主枝または樹全体が枯死します。

形態

幼虫は赤紫色から赤褐色のイモ虫状で老熟幼虫の体長は約40mmです。成虫は翅を広げると40~60mmになり、ほぼ全身が鱗粉で被われ、前翅は全体が灰褐色で黒い模様が見られます。



老熟幼虫



成虫

発生生態

成虫の発生回数は年1回、発生時期は6月下旬から8月中旬頃、発生盛期は7月中旬から下旬頃です。卵は粗皮の隙間などに卵塊で産み付け、ふ化幼虫が集団で食入します。幼虫期間が長く、羽化するまで2年以上（寒冷地では3年以上）を要すると考えられています。

☆耕種的な防除

ヒメボクトウは粗皮の隙間などに卵塊を隠すように産卵する習性があるため、冬期間に粗皮削りを実施します。また、樹冠内部への薬液の到達性をよくするため、冬期のせん定及び夏期の新梢管理を適切に行ってください。被害樹を伐採した場合には、寄生部位を園内に放置せず適切に処分しましょう。

☆薬剤による防除

◎ボクトウコンーHの設置

成虫発生前の6月中旬に交信かく乱剤のボクトウコンーHを10a当たり100本設置します。

◎フェニックスフロアブルの散布

成虫発生初期の7月上旬にジアミド系殺虫剤のフェニックスフロアブル 4,000倍を散布します。

◎バイオセーフの樹幹注入

5月中～下旬と9月中旬～10月上旬に昆虫病原性線虫剤のバイオセーフをリンゴでは2,500万頭/2.5～25L、ニホンナシでは2,500万頭/25Lを樹幹注入します。

☆防除のポイント

ヒメボクトウは成虫の交尾を阻害するボクトウコンーHの設置、ふ化幼虫の食入を阻害するフェニックスフロアブルの散布、幼虫の密度を低下させるバイオセーフの樹幹注入を組み合わせることで効果的に防除することができます。

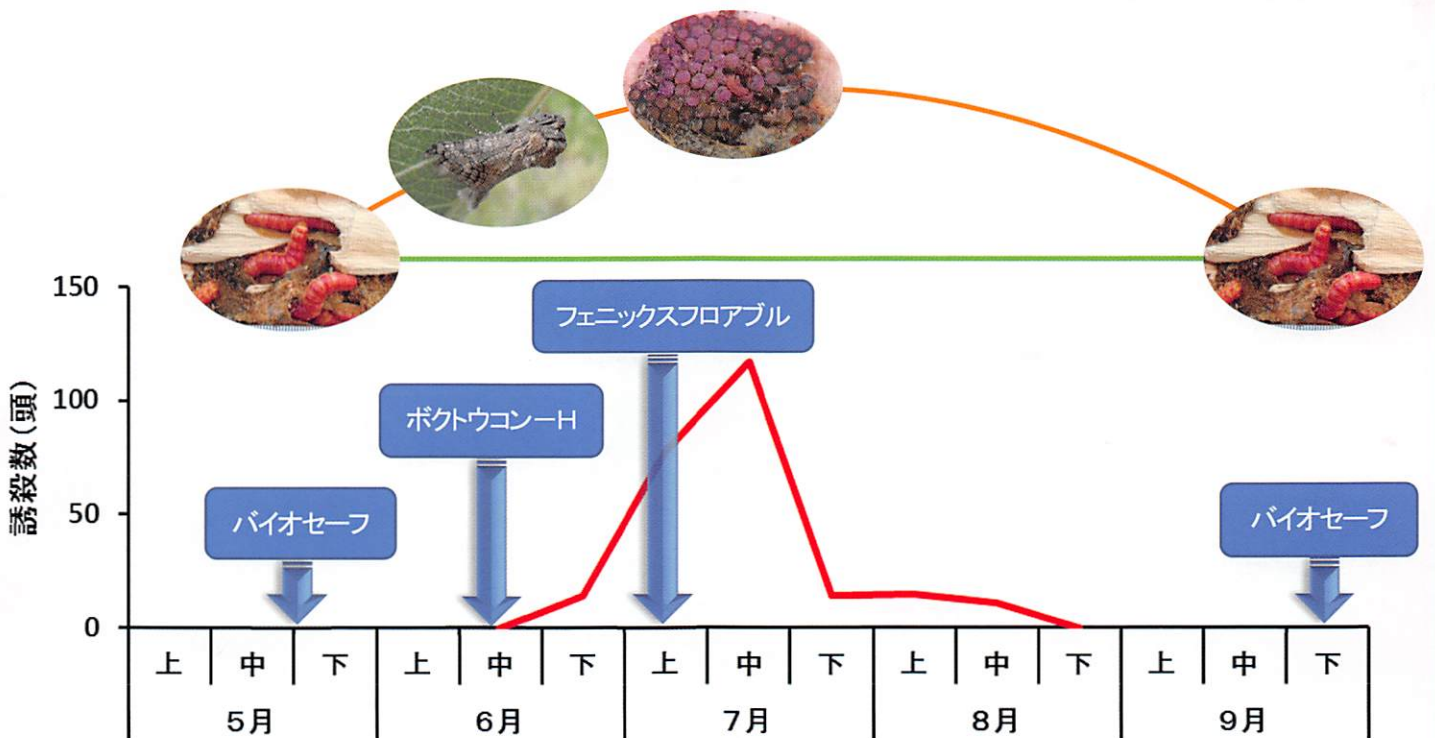


図 成虫の発生時期と薬剤の処理体系

(月・旬)

☆被害と対策

イチョウではせん定痕（被害①）および環状剥皮の剥皮部（被害②）が主な産卵部位になりますので、トップジンMペーストなどの癒合剤を塗布することで傷口を保護してください。また、枝吊りの結束部に産卵される場合も多く見られますので注意しましょう。



イチョウの被害①



イチョウの被害②

☆薬剤による防除

幼虫活動期（ただし、収穫 60 日前まで）にスミチオン乳剤 100 倍を樹幹散布します。

類似する被害

ヒメボクトウの被害はカミキリムシ類による被害と似ています。しかし、カミキリムシ類が排出するフラスには繊維状の木屑（被害①）が多く混じる傾向があります。また、リンゴやニホンナシでは細い枝に被害（被害②）が発生することは少ないのでフラスの状況と被害部位から両種の被害を区別することができます。



カミキリムシ類の被害①

2013/06/13



カミキリムシ類の被害②